8

実践研究報告 No.1722

アートの製作を通したコミュニティ形成と空き家活用体制構築を目指す

実践研究テーマ：クリエイティブコミュニティによる空き家活用体制の構築

8

実践研究報告No.1722

クリエイティブコミュニティによる空き家活用体制の構築

―「未来の有田」シナリオプロジェクト―

東洋大学 准教授/田口 陽子
中川 大起、クリンカス クン、柄沢 祐輔、後藤 隆太郎、
三木 悦子、清水 耕一郎、田中 妙子

本プロジェクトは、陶磁器生産地として困難な時期にある有田町の空き家活用方法を探るために、保存物件の空き家において地域の担い手がアーティストとともに文化芸術活動に取り組むものである。
ワークショップの成果である「未来の有田」のシナリオをもとに２つのアート作品を制作し、それらを都市空間に埋め込むことにより、まちづくりにおける地域住民の議論を誘発し、公設民営による空き家活用の動きにつなげた。
フランスの哲学者エリー・デューリングは未来の様々な可能性を示唆するアートを「プロトタイプ」として提示するが、ここではプロトタイプとしてのアートの制作を通じたコミュニティ形成と空き家活用体制構築が目指されている。

佐賀県有田の風景

アムステルダム市の文化芸術活動を通じたコミュニティ形成活動

1. 背景と目的

1.1　文化芸術活動を通じたコミュニティ形成

ポスト工業社会における新たな都市のあり方としてC.ランドリーやR.フロリダが提唱する創造都市が注目されるなか、文化芸術の創造性を生かした都市再生が世界各地で取り組まれている。

アムステルダムはそのような創造都市の一例であり、筆者等は**アムステルダム市が駆け出しのクリエイターたちの文化活動に対しての所得再分配に取り組んでいることに注目**し、「創作活動の場を核とした複合空間における共創と集客拠点形成 –オランダのDe Ceuvelにおける空間マネジメントの実態調査-」において、造船所跡地にクリエイターたちの手によって開発された小さな都市空間のマネジメントについて調査・研究を行った文1)。

この先行研究では、立地・空間計画についての実態調査、持続可能な開発に向けた取組みや運営方法の調査、クリエイターへのインタビュー調査、来訪者へのアンケート調査を実施し、

(1)**持続可能な都市のあり方を提示**することにより共感する人々のコミュニティが形成され、結果的に地域の住環境としての魅力が向上していること、(2)**様々な専門性を持つクリエイターたちが協会を組織し運営に携わる**ことにより、創作活動の場が都市住民に開かれた公共的空間になっていること、(3)高度な知識・技術の蓄積、すなわち**人的資本の存在**がクリエイターたちを惹きつけていること
を明らかにした。

我が国においても文化芸術の創造性を生かした都市再生が各地で取り組まれているが、先行研究で明らかにしているように、**文化芸術活動を通じてクリエイティブコミュニティが形成された結果、地域の住環境としての魅力が向上している**ことは注目に値する。また、文化芸術活動をかたちに残らない多種多様なイベントとして実施するだけでなく、持続可能な都市に向けた様々な実験を実際の都市空間のなかで行い、望ましい都市開発のあり方を空間として人々に提示している点も重要である。

De Ceuvelでは観念的に都市像を描くことにとどまらず、望ましい都市像を創作活動の場として実際の都市空間のなかに埋め込むことで、未来の都市や社会のあり方についての様々な可能性を議論する場をつくりだすことに成功しているといえる。

1.2　佐賀県有田町における文化芸術の創造性を生かした都市再生の取組み

産業構造の変化による製造業の衰退は伝統的産業都市の有田においても深刻であり、更には製造業にかかわる人口の減少も受けて、有田では多くの空き工場や空き家を抱えている。

重要伝統的建造物群保存地区に指定されている内山地区においても空き家が多数存在している状況にある。このような困難な状況を乗り越えるべく、2016年の有田焼創業400周年にあわせて文化芸術の創造性を生かしたさまざまな取組みがなされた。

そのなかで特に注目されるのが、16組のクリエイターと16組の有田焼事業者とが協働して新しいタイプの有田焼の商品開発を進める**2016 /project**など、佐賀県とオランダが推進するクリエイティブ連携・交流である。商品開発と並行して両国・地域間の人的交流や教育・学術・研究機関相互の交流が行われているが、**これまでの取組みは行政主導の側面が大きく、現段階では民間主体の自立的な活動になっていない。また、地域住民が自由に参加できるオープンな場になっていない**ことも課題である。

有田は伝統的産業都市として有名であるが、17, 18世紀にはオランダ東インド会社との取引により富を蓄え、幕末にはドイツ人のG.ワグネルから石炭窯やコバルトの技術を取り入れるなど、それぞれの時代の国際関係のなかで変容を受け入れて有田焼を発展させてきた歴史がある。**有田がものづくりのまちとして持続的に発展していくためには**、現代のグローバル社会における変容を受け入れてイノベーションを起こしながら**「未来の有田」を築いていくことが重要**であり、新たなクリエイティブ産業の発展が住環境の質を引き上げると考えられる。また、有田のポテンシャルとして国内外のクリエイティブな人々を引きつける魅力として手仕事も含めた高度な生産技術が挙げられ、近年は国内外からの観光客が増えているほか、有田町の取組みにより移住者も増えつつある。ここ数年でゲストハウス、シェアハウス、カフェなどが増えるなど、「ものづくり」が「ことづくり」と結びつくことにより国際色豊かなまちになりつつある。

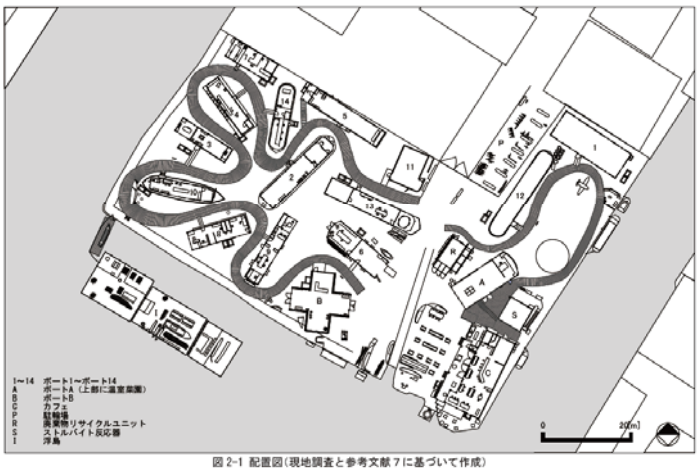

図 2-1 配置図（現地調査と参考文献７に基づいて作成）

1.3　本活動の目的

本活動は、アムステルダムのDe Ceuvelを対象とする先行研究において得られた知見に基づいて、佐賀県とオランダ大使館が推進するクリエイティブ連携・交流とも協働しながら空き家を活用した文化芸術活動を実施するものであり、**地域の担い手が未来の都市のシナリオを描き、それを高度な知識・技術をもつアーティストがアート作品により表現するというプロジェクトの実践を通じて、活動拠点とする空き家を戦略的な都市のシナリオに沿って活用していくための実践的知見を得ること**を目的としている。同時に、**地域住民のまちづくりにおける意識と行動の変化を促しつつ、クリエイティブコミュニティを形成することを目指す**。

本活動は国内外のアーティストのレジデンス滞在やワークショップなど、従来の製造業の枠組みにとらわれない**創造的な活動としてアート制作を地域の担い手とともに行い、空き家を提供する人、活用する人、コーディネートする人、リノベーションなどの費用面を支援する人を発掘し、有田に多く存在する産業の「遺産」を「資産」として活用していくエリアマネジメントの体制を構築することを狙い**としている。フランスの哲学者エリー・デューリングは未来の様々な可能性を示唆するアートをプロトタイプ文2)として提示するが、ここでは**プロトタイプとしてのアートの制作を通じたコミュニティ形成と空き家活用体制構築を目指す**。

表2－1　インタビュー結果

インタビュー対象	質問1）空き家を活用した文化芸術活動としてどのような活動や場がありうると思いますか？	質問2）空き家活用に関わるとしたらどのような関わり方ができると思いますか？	質問3）文化芸術を推進するにあたって今後どのようなことが期待できると思いますか？	質問4）文化芸術を推進するにあたって今後どのような課題があると思いますか？
まちづくり関係者（3人）	・ハッカソン ・住民と共に提案や活動する場 ・オープンシャッタープロジェクト ・アーティストやクリエイターに解放する場	・盛り上げる ・身軽で動ける ・やりたいことを主催でやる ・リノベやDIYのチームをまとめる	・活動によりまちが盛り上がる ・共通点を追って様々な人が活動を始める ・有田に若い人が根付く	・時間が必要 ・準備が必要 ・まちの人が溶け込める雰囲気づくり ・地域住民の理解と支援
公務員（3人）	・ワークショップ ・アーティストレジデンス ・焼物に絡んで色々な人が来る場	・クリエイターの滞在支援 ・ワークショップ実施支援 ・情報提供	・新たなクリエイティブ性が加わり全体として魅力的なまちになる ・交流人口を含み人が増える	・有田で関わっていく人の盛り上がり ・地元の理解
芸術家（2人）	・若者主催で住民がフォローしながら活動する場 ・コンサート ・寺子屋 ・金継ワークショップ	・アーティストとして関わる	・人が交わる ・経済の循環 ・意識改革	・有田のイメージを維持、コントロールする人が必要 ・若者を応援する人 ・地域住民の説得
建築関係者（3人）	・アーティストレジデンス ・芸術家を育てるアトリエ ・煎茶道体験の場 ・スタンプラリー企画した空き家美術館巡り	・ハード面整備 ・初期段階の交流風景づくり ・空き家の掃除	・焼物以外や若者の参加が増える ・若い人のエネルギーを内山地区から発信させる ・人が増えて活気付く ・歴史や高度な伝統技術を知ってもらうことができる	・地区の行事や近隣者との交流に惑いが出そう ・宿泊施設の設置 ・地域の理解、強調していく意識
空き家所有者・活用者（5人）	・老若男女が交流する場 ・貸しギャラリー ・外国人ターゲットの場 ・学生主催のゲストハウス	・空き家・空きスペースを活用してもらう ・外国人の対応 ・知識や今までの実践を活かす ・コミュニティのネットワークを生かす	・海外の人の新しいデザインができる ・世界に発信される ・イベントなどにより生きた町だと思われる ・大学で活動をサイクルしてほしい	・異文化理解、英語 ・資金援助 ・学生の勢い ・有田の文化や歴史を知ってもらうこと

2. プロジェクト実施前の調査等

2.1　空き家所有者・地域の担い手へのインタビュー

今後の文化芸術による空き家活用の課題と可能性を把握するために、まちづくり会社役員や地域おこし協力隊などのまちづくり関係者3 人、佐賀県や有田町に勤める公務員3 人、芸術家2 人、建築関係者3 人、空き家所有者・活用者5 人の合計16 人にインタビューを実施し、空き家を活用した文化芸術活動に対する具体的な意見を挙げてもらった（表2-1）。

空き家を活用して**どのような文化芸術活動が可能か、空き家活用においてどのような関わり方が可能か**を質問したところ、有田の文化や歴史を生かした　ワークショップやアーティストレジデンス、地域住民や若者、外国人など、様々な人が交流する場が挙げられた。まちづくり関係者からはイベント主催やリノベーションなど、公務員からは公的立場からの支援や情報提供、芸術家からは芸術創作活動による参画、建築関係者からは空き家掃除や簡易な修理などハード面整備、空き家所有者・活用者からは空き家提供や外国人対応など、それぞれが今までの経験と異なる専門性を活かして文化芸術活動を実施したり、空き家の再生に関わったりできると考えていることがわかった。文化芸術活動を推進するにあたって**今後の期待と課題**を質問したところ、期待として地域の魅力向上、経済効果、人口の若返り、課題として新旧住民の相互理解や資金面の問題などが挙げられた。

2.2　関係団体との協議

在日オランダ王国大使館、佐賀県肥前さが幕末維新博事務局の関係者、有田町のまちづくり課と必要に応じて協議を行った。

在日オランダ王国大使館からは本プロジェクトにおけるオランダのアーティスト招聘に対して助成が得られることになった。

佐賀県肥前さが幕末維新事務局との協議により、佐賀市中心市街地の水辺に整備されたオランダハウスでトークセッションを開催することになった。

有田町のまちづくり課とは江越邸を今後どのように活用していくかを協議しており、整備方法や事業スキーム、運営主体について検討している。

図3－1　江越邸

3.　「未来の有田」プロジェクトの概要

3.1　活動拠点：江越邸

江越邸は当時有田町長であった江越米次郎により昭和10年に建築された和洋折衷の住宅あり、**有田内山伝統的建造物群保存地区の保存物件**のひとつである（図3-1）。

米次郎の父は明治14年に日本初の実業教育機関である陶磁器工芸学校「勉脩学舎」を設立し、英語教育にも力を入れた江越礼太であり、また、昭和の住宅不足の時代には江越邸に有田工業高等学校の教員や生徒が間借りするなど、江越邸は有田焼の近代化や国際的な人材育成に縁のある住宅であるといえる（図3-2）。

現在、江越邸は空き家となっているが状態がよく、所有者は今後の有田の発展を担う人材育成の場として活用することを望んでいる。そこで人材育成の場としての活用の第一歩として、国際的な文化芸術活動を江越邸で行うことになった。

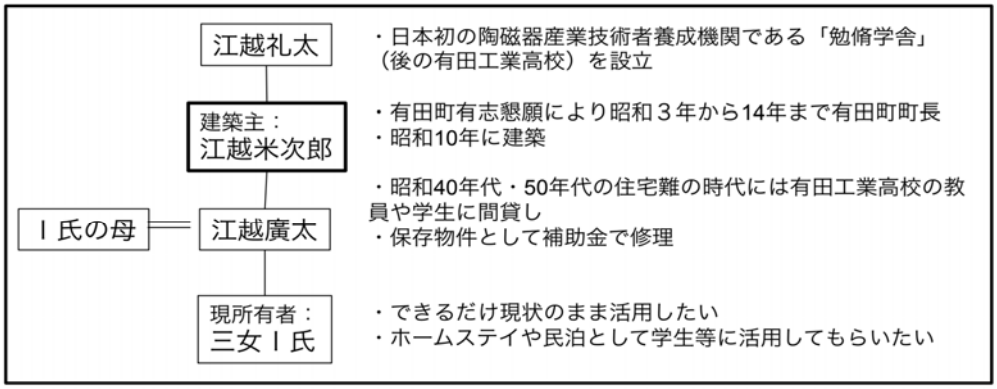

図3－2　建物履歴

3.2　プロジェクトの主体と企画概要

本活動の主体は**「有田クリエイターズビレッジ会議」**であり、日蘭建築協会の役員が国際交流、伊万里・有田地区ヘリテージマネージャー協議会の建築士が建築士が建築物の修理・修景、東洋大学あるいは佐賀大学に所属する教員が学生などの人材育成を担当して活動を推進する（図3-3）。佐賀県とオランダ大使館が推進するクリエイティブ連携・交流や、有田町のまちづくり課や地域おこし協力隊とも連携しながら「未来の有田」シナリオプロジェクトを実践する。

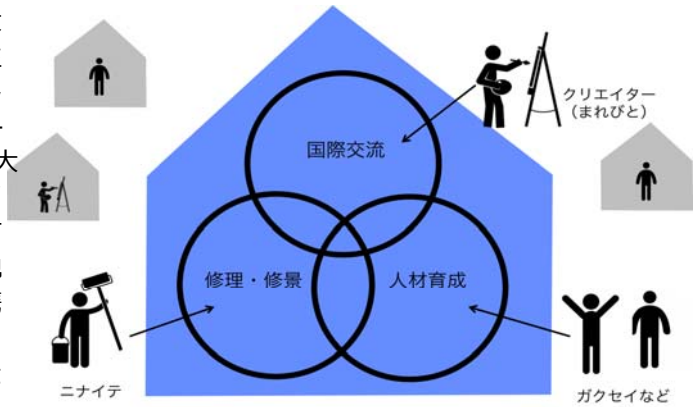

図3－3　有田クリエイターズビレッジ会議の役割

「未来の有田」シナリオプロジェクトは地域の担い手が未来の都市のシナリオを描き、それを高度な知識・技術をもつアーティストがアート作品により表現するというものである。以下のように企画を立ててプロジェクトを実施する。

① 江越邸などにおいて**ワークショップを開催**し、学生や地域の担い手が地域の資源や課題についてディスカッションすることを通じて未来の有田のシナリオを生み出す。
② オランダに縁のある**２組のアーティストを招聘**する。有田町内外で交流や取材を行ったあと、アーティストは居住地に戻り、ワークショップの成果である未来の有田のシナリオをもとに**アートを制作**する。有田クリエイターズビレッジ会議はアート制作をサポートする。
③ 有田クリエイターズビレッジ会議は**江越邸の一室をアートスペースに改装してアート作品を設置**し、地域住民を招いて内覧会・展覧会を開催する。
④ プロジェクトを広く知ってもらい、地域活性化に役立てることを狙いとして**プロジェクトの記録映像を作成**する。

なお、アート制作のプロデュースは日蘭建築文化協会、プロジェクトのなかで行うツアーや江越邸をアートスペースに改装する工事は建築士、学生への教育研究の機会提供は大学教員が担当して実施する。

4. 未来の有田のシナリオづくり

4.1 学生の江越邸滞在＋ワークショップ（2017.9.14-16）

2017年9月14日からの４日間、東洋大学生４人と佐賀大学生２人が江越邸に滞在し、有田のヘリテージを巡るツアーで発見した有田の地域資源に基づいて、未来の有田のシナリオおよび江越邸の活用方法を検討するディスカッションを行った（図4-1, 図4-2, 図4-3）。

9月16日に開催した第１回「江越邸で未来の有田をいっしょに考える会」では、学生たちが検討した成果を地域の担い手（建築士、有田町役場職員、町会議員、デザイナー、江越邸所有者など）の前で発表し、**未来の有田の方向性**について意見交換を行った（図4-4）。意見交換の結果、**「豊かな自然と伝統的町並みのなかにある革新的なまち」**であること、**「生産地であることを生かした新しい観光・人材育成・ライフスタイル」**を推進していくことが今後の有田のまちづくりの方向性として重要だろうということが参加者のあいだで共有された。

図4－1　ディスカッション(参加者:学生)

図4－4　第1回　江越邸で未来の有田を一緒に考える会

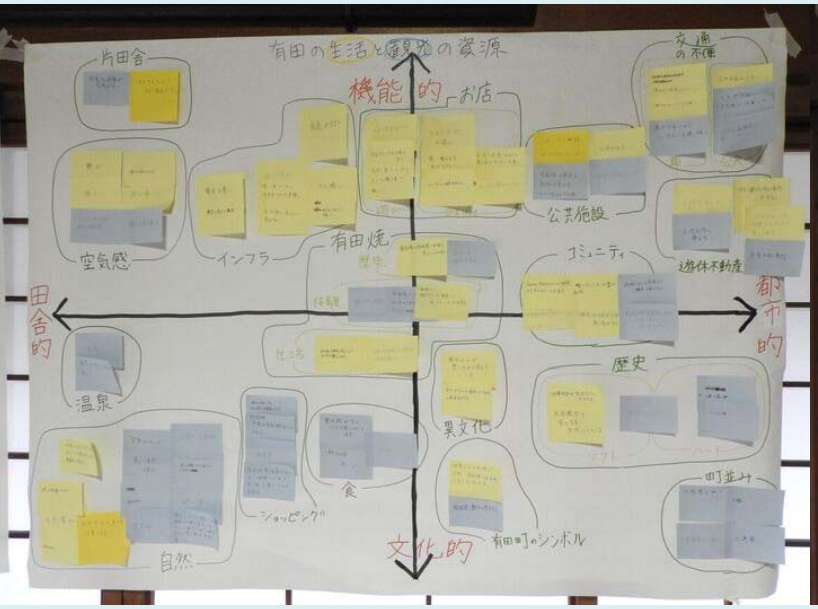

図4－2　有田の生活と観光の資源

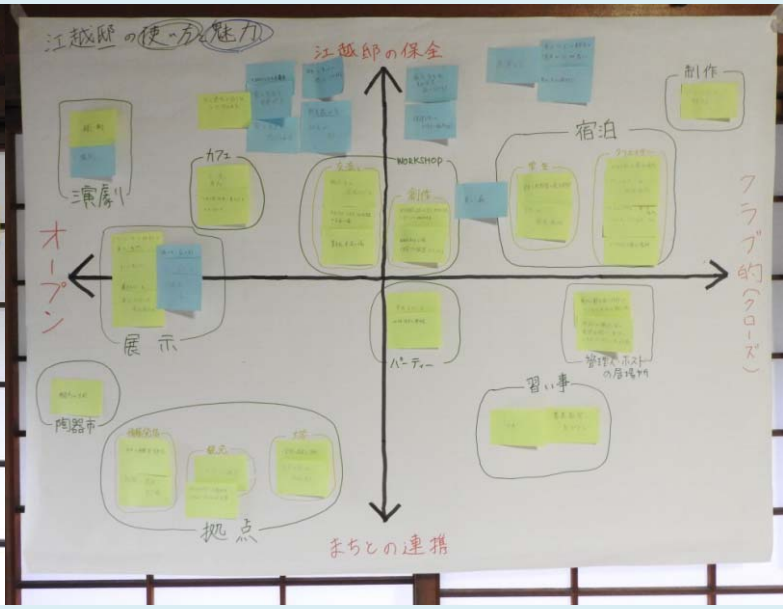

図4－3　江越邸の魅力と活用方法

4.2　アーティストの江越邸滞在＋ワークショップ

（2017.11.10-12）

2017年11月には、日本在住のオランダ人画家の**ロク・ヤンセン氏を招聘**して、アート制作のための取材ツアーと第２回「江越邸で未来の有田をいっしょに考える会」を開催した（図4-5，図4-6）。11月11日に開催した第２回「江越邸で未来の有田を一緒に考える会」では、参加者の佐賀大学生と地域の担い手（建築士、有田町役場職員、ジャーナリスト、カメラマン、ゲストハウス経営者、佐賀県のレジデンスコーディネータ、レジデンス滞在者、江越邸所有者など）に、現在の有田の魅力と課題を挙げてもらった上で、未来の有田の都市風景がどうなるとよいと思うかを提案してもらった。

その結果、**「煙突を生かした未来的な景観」、「職人がものづくりに勤しむ様子が身近に感じられるまち」**などの様々な意見が挙げられた（表4-1）。

アート制作のための取材ツアーでは、九州陶磁文化館、泉山磁石場、トンバイ塀通り、本通り、陶山神社、猿川渓谷などの街並みや自然環境のほか、今右衛門窯において職人が作業している様子や2016/ギャラリーなどにおいて取材を行った。

表4－1　ワークショップで提案された未来の有田の風景

- ものづくり大学（未来的な仮設建築群）
- 内山地区（本通り）の観光・展示・交流空間（「魚の骨」のような都市構造…小路：クリエイター創造・生産空間／交差部：融合）
- 焼物にとらわれない多能・多感なクリエイティブ空間
- 有田人が担い手となって活気付くまち
- 脱アスファルトの道路（自動車 NG、セグウェイ OK）
- 泉山にコンサートホール or シアター
- 煙突を生かした未来的な景観
- 内山地区をたくさんの歩行者が歩けるような歩行者空間
- 都会の喧騒を逃れ、ゆっくりまったり癒される町散策している様子
- 車が空を飛ぶことで安全に通りを歩くことができるまち
- 視覚的・身体的に「窯」を感じることができるまち
- 観光客でも路地に入りやすくし、表通りからは見えない職人さんの姿が身近になるといい
- ウェブサイトなど情報メディアでもっと有田の空間的な魅力を発信する
- 山や川との自然環境に心身が解放され健康になるまち
- 川を親水空間にして居場所をつくる
- 路地の脱アスファルト化
- 郷愁と芸術をたのしみながら散策できるまち
- アート好きなど老若男女がいろんなところで井戸端会議しているまち
- セラミックスケープ
- 陶磁器をつかったカフェのような屋外の溜まり場がほしい
- 生産している様子がもっと見え隠れするまち
- 移住者を受け入れる環境
- セグウェイなどスマートモビリティのツアー
- アート×陶磁器

図4－5　取材ツアー(参加者：ロク・ヤンセン氏ほか)

図4－6　第2回　江越邸で未来の有田を一緒に考える会

4.3　アーティストの江越邸滞在＋トークセッション

（2018.5.19-22）

2018年5月には、オランダ在住の日本人振付師の遠藤暁子氏とドイツ人映像アーティストのニコラ・ウンガー氏を招聘して、佐賀市にあるオランダハウスでの**トークセッション「Dancer in the Historical City ―未来の有田プロジェクトに向けて」とアート制作のための取材ツアーを開催**した（図4-7，図4-8）。

オランダハウスは佐賀県とオランダ大使館が推進するクリエイティブ連携・交流の一環として佐賀市中心市街地に整備されたスペースであり、**トークセッション**は佐賀県の後援を取り付けて開催することになった。トークセッションには有田クリエイターズビレッジ会議のメンバーのほかに、建築士、佐賀県職員、レジデンス滞在者、学生などが参加し、アートがまちづくりにどのように貢献できるかについて民俗学などの観点から議論され、人々に様々な視点からものごとを捉える契機を与えることがアートのひとつの意義であろうということが共有された。

トークセッション後はオランダハウス横の水辺での**懇親会**をクリークネットさがのサポートにより行った。

アート制作のための取材ツアーでは、九州陶磁文化館、泉山磁石場、トンバイ塀通り、本通り、陶山神社、猿川渓谷などの街並みや自然環境のほか、岩尾磁器、辻精磁社、柿右衛門窯、幸楽窯、有田ポーセリンラボ、李荘窯、In Blue暁において工場やギャラリーにおいて取材を行った。

図4－7　オランダハウスにおけるトークセッション

図4－8　取材ツアー

5. 未来の有田のシナリオを表現するアートの制作

5.1　アーティストの選定

有田はオランダ東インド会社との取引を始めた17世紀からオランダと深い関係にあり、現在は佐賀県とオランダ政府が協定を組んでクリエイティブ連携・交流を推進している。そこで、有田クリエイターズビレッジ会議のメンバーが所属している日蘭建築文化協会を介してオランダに縁のある２組のアーティストを招聘することにした。

１組目　ロク・ヤンセン氏

日本在住のオランダ人画家。彼は建築を専攻していたバックグラウンドを持ち、レム・コールハース率いるOMAやファッションブランドのPRADAなどにおいてアートディレクターとして活躍している。専門的な調査に基づいてEUの歴史を大きなパノラマのコラージュとして表現したアート制作にかかわった実績があり、今回のプロジェクトで調査に基づいて表現する未来の都市風景の制作にふさわしい人物であるとしてヤンセン氏を招聘することにした。

２組目　遠藤暁子氏、ウコラ・ウンガー氏

オランダに在住している２人のアーティストで、日本人振付師の遠藤暁子氏とドイツ人映像アーティストのニコラ・ウンガー氏。遠藤氏はダンスパフォーマンスの振付に日本で民俗学を専攻していたときの知識や経験を活かしているところが特徴的であり、ウンガー氏等とともにMERGEというプロジェクトを立ち上げ、市民活動として都市の様々な場所でダンスパフォーマンスを繰り広げる活動を行っている。今回のプロジェクトも市民活動として実施するものであり、また、民俗学的な手法を取り入れることによりまちづくりにおいて効果的なアート表現が可能である考えられることから、遠藤氏とウンガー氏を招聘することにした。

5.2　コンセプトおよび展示方法の検討

３回にわたる江越邸滞在とワークショップを通じて、有田は**「豊かな自然と伝統的町並みのなかにある革新的なまち」**であり、これからは**「生産地であることを生かした新しい観光・人材育成・ライフスタイル」**を展開していくべきだということが、未来の有田のシナリオとして組み立てられた。また、「煙突を生かした未来的な景観」、「職人がものづくりに勤しむ様子が身近に感じられるまち」などの具体的な未来の風景についても検討された。

主査の田口と委員の柄沢がコンセプトアドバイザーとなり、ワークショップで検討した未来の有田のシナリオに基づいて、有田の風土である「自然と人間」、「伝統と革新」の調和をコンセプトの核として抽出し、**ロク・ヤンセン氏には襖絵により未来の都市風景**、**遠藤暁子氏とニコラ・ウンガー氏にはダンスパフォーマンス映像**により未来の生活風景を、焼物や町並みなど有田固有の要素を用いて描いてもらうことにした（表5-1）。

展示方法は２つの作品を江越邸の６畳間にL字に並置することにした（図5-1）。未来の有田に関する２つのアート作品を隣り合わせることにより、多義的な意味を生じさせ、シナリオの大筋を伝えつつも見た人が様々に解釈できることを意図した。スクリーンやプロジェクター設置棚の設置においては既存の建物を損傷しないように配慮して設計・施工した。

表5－1　コンセプト

FUTURE ARITA project

やきものづくりは大地や森から得られた資源をかたちにしていく人間の営為です。1616 年に陶祖・李参平が泉山の磁石を発見して以来、有田の人々は自然と一体化しつつ有田の風土を築いてきました。そして、先人からものづくりの遺伝子を受け継ぎ、伝統的に革新を追い求めてきました。２つの作品はものづくりのまち有田における「自然と人間」、「伝統と革新」の調和をテーマとして未来の都市風景を描いています。

図5－1　江越邸のアートスペース

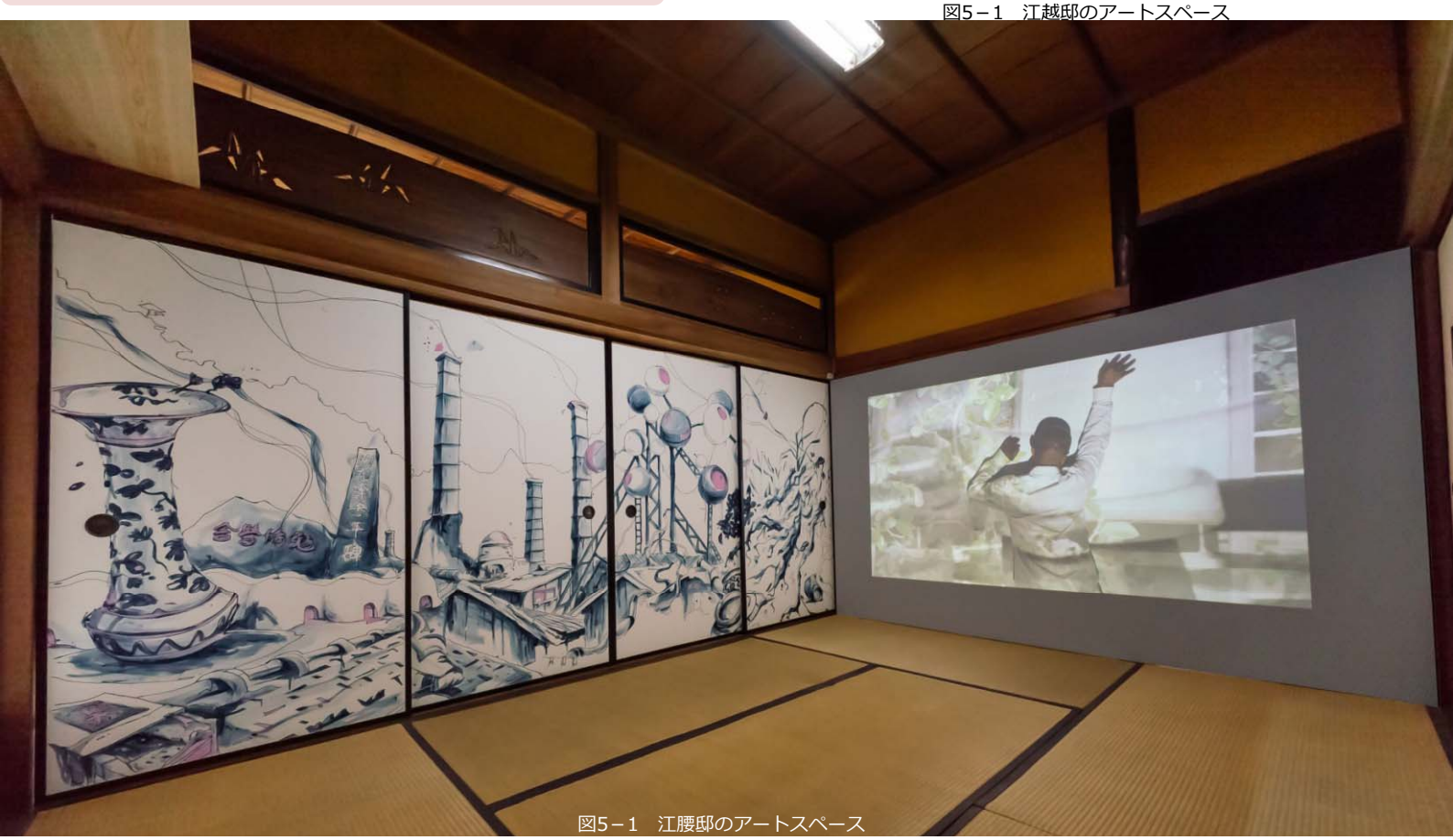

図5－1　江腰邸のアートスペース

5.3　アート作品注1) の解説

(1)Arita Future Cityscape by Lok Jansen

ロク・ヤンセン氏は、有田の山並みを背景に過去・現在・未来そして自然へと回帰していく都市風景の変遷を、マンガの手法を用いて４枚の襖に描いた（図5-2）。ものづくりの革新性を表象する樹木状のタワーは自然や伝統的町並みと有機的に調和して描かれ、未来の有田の創造的な姿が明るく表現されている。これは江越邸の２階の窓から見える煙突の風景に着想を得た作品であり、有田で取材した要素が散りばめられている。色は青を基調とし、ハイライトとしてピンクが用いられている。青は有田焼の染付の色であり、顔料がどのように各地に伝わり、進化してきたかについても調査し、その知見が表現に生かされている。古いものと新しいもの、自然と人工物が対立するのではなく、有機的に調和する様子が描かれている。

図5－2　Arita Future Cityscape by Lok Jansen（© ･Lok Jansen）

(2)Future Arita by Sato Endo and Nicola Unger

遠藤暁子氏とニコラ・ウンガー氏は、美しい自然の風景と伝統的な町並みの中で人々がものづくりに勤しむ未来の有田の姿を**ダンスパフォーマンス映像により描いた**（図5-3）。未来の有田の住人を演じるダンサーが、投影された有田固有の磁器、古地図、図案、山並み、町並み、建築空間のイメージと戯れ、想像上の未来の都市風景が生き生きと描き出されている。今後、有田の新しい担い手の受け皿として活用される予定の江越邸も未来の風景の一部として登場するほか、有田の自然風景、都市風景、やきもの、やきものの図案などがダンサーとの相対として様々なスケールで登場し、様々な視点から有田のまちを眺める体験に人々を誘う作品に仕上がっている。映像に音声はなく、虫の音や電車の走行音などの環境音と融合して現地に設置されることにより完成する作品である。

図5－3　Future Arita by Sato Endo and Nicol　Unger (映像作品のｽｸﾘｰﾝｼｮｯﾄ)

6. 「未来の有田」シナリオアートの公開

6.1 内覧会

2018年8月18日（土）の午前に有田町長など地元の有力者、取材に協力してもらった窯元などを招待して内覧会を開催した（図6-1）。主催者を除く参加者は10人であった。内覧会では、プロジェクトの趣旨と概要の説明、メンバーの紹介、アート制作のプロセス説明をしたあとで、まずは解説なしでアート作品を鑑賞してもらった。

２回目の鑑賞のときに主査の田口がアート作品が表現している未来の有田のシナリオのひとつの解釈、またシナリオを表現している有田固有の要素が織りなす暗喩的な意味について解説した。また同席したアーティストには、自らの作品が都市の現状や歴史の分析に基づいて制作されていることなどを解説してもらった。

解説なしの１回目の鑑賞では、作品のなかに使用されている有田固有の風景や陶磁器などの要素が散りばめられているので、有田をよく知る参加者たちは、退屈することなく未来の有田を思い想いに想像して鑑賞している様子であった。

解説付きの２回目の鑑賞においても、参加者たちは解説に熱心に耳を傾けて作品鑑賞している様子であった。鑑賞後、地元窯元の参加者は、「アートの新しい使い方を見せてもらった」、「幽体離脱して普段とは違う視点から自らが陶作している様子を見ているようだった」といった感想を話していた。

6.2 展覧会とオープニングパーティ

内覧会のあと２日間に渡って展覧会を開催し、アート作品の公開を行った。来場者44人のうち、ほとんどが主催者の知人・友人が来場者であり、近隣住民など一般の人々は少数であった注2)。有田町民のほかに東洋大学や佐賀大学の学生など有田町外からの来場者が半数くらいであった。来場者の求めに応じてアーティストもしくは主催者がアート作品の解説を行い、アートを鑑賞してもらった（図6-2）。１日目の夜にはオープニングパーティをアートスペースの隣の座敷で開催した（図6-3）。

プロジェクトを通じて知り合った地元のカメラマンに記録映像の制作を依頼し、アートスペースの作品展示の記録映像のほか、展覧会とオープニングパーティの様子の記録映像を制作してもらった（図6-4）。記録映像文3)はYouTubeで公開し、プロジェクトの情報発信を行うことを試みている。アート制作から派生して地元のクリエイターの発掘につながったことはひとつの成果である。

7. 活動を通じて得られた成果および今後の課題

7.1 アート作品鑑賞者へのアンケート調査

アート作品鑑賞者に対してアンケート調査を実施した。

属性は、男女比が概ね半々、幅広い年代が来場した。主催者の関係者の20代・40代・60代が多かった一方で、50代が少なかった。居住地は有田町が過半数を占め、佐賀県内と佐賀県外が同数であった注3)。

・アンケートの質問と回答

「２つのアート作品を鑑賞して、未来の有田に対するイメージが膨らみましたか」という質問に対しては、約８割が「とても膨らんだ」あるいは「やや膨らんだ」と 回答した（34/41，図7-3）。**「２つのアート作品を鑑賞して、未来の有田について誰かと議論してみたくなりましたか」という質問**に対しては、約８割が「はい」と回答した（33/41，図7-4）。

自由回答記述方式により、**「未来の有田がどのようになっていくとよいと思いましたか、未来の有田をどのようにしていきたいと思いましたか」という質問**には、当事者の立場から新しい有田の姿を思い描く回答が複数あった。佐賀県内在住者からは、「現代アートと伝統的な町並みを切り離さずアピールできるとよい」など、地域の資源を生かした新しい取り組みに注目する回答が複数あった。佐賀県外在住者からは、地域住民の誇りや関心を醸成する必要性について指摘する回答が複数あった。感想・意見として、アートを媒介に都市の見え方が変容し、結果として、人々は都市の新しい可能性を思い思いに想像している様子が窺えた。

また、初めて有田を訪れた佐賀県外在住の20代の被験者の感想からは、アート作品鑑賞やプロジェクト関係者との交流を通じて有田への関心が高まっていることが読み取れる。そのほか、取組みの情報発信の必要性や、若者とつながることの重要性を指摘する意見が挙げられた。

図6－1　町長等が参加した内覧会（©・Lok Jansen）

図6－2　展覧会における兆民とアーティストの交流

7.2 公設民営による江越邸活用に向けた新たな動き

江越邸は、将来的に有田町が**移住促進のための宿泊研修施設として整備・活用していくことを検討**している。有田町が所有者と長期の定期借家契約を結んだ上で改修工事を施し、地域おこし協力隊出身者が立ち上げたNPO法人が運営を行っていく計画だ。このような活用に向けた新たな動きが活動を通じて現れたことはひとつの成果である。

有田には窯業に限らず様々な技術・技能を有する人材が多数存在しており、活動を通じて様々な分野の20代から40代の人材を発掘している。今後、江越邸を移住促進のための宿泊研修施設として活用していく際には、このような若い人材と連携を図りながら、空き家活用を構築することが重要である。また、有田の若い人材を刺激しつつ、未来の有田の担い手となる移住者を発掘し、クリエイティブコミュニティを形成していくためには、今後も国際的な文化芸術活動を継続していく必要がある。設置主体の有田町、運営主体のNPO法人などとの協議を通じて、江越邸活用の方策を今後も探っていきたい。

8. まとめ

未来の有田のシナリオについて議論し、それを表現するアートを制作・展示するという活動を通じて、技術・技能を有する若い人材を発掘し、**公設民営による江越邸活用の方針が得られたことは大きな成果**である。また、本活動を通じて制作したアート作品が未来の有田についての人々の議論を誘発していることからわかるように、江越邸を拠点に未来の都市や社会のあり方についての様々な可能性を議論する場が形成されつつある。実際の都市空間のなかに想像上の都市空間をアートとして挿入したことにより、人々の現実の見え方を変化させ、未来の都市の様々な可能性について想起させることに成功したといえるだろう。

＜研究委員＞
・中川　大起
㈱リライト・取締役
・クリンカス　クン
frontoffice Tokyo・取締役
・柄沢　祐輔
柄沢祐輔建築設計事務所・代表
・後藤　隆太郎
佐賀大学・准教授
・三木　悦子
佐賀大学・講師
・清水　耕一郎
アルセッド建築研究所・取締役
・田中　妙子
田中博昭建築設計室

＊当実践研究報告普及版は『住総研 研究論文集・実践研究報告集』No.45の抜粋版です。参考文献は報告集本書をご覧ください。